

校内研修のデザインと効果的な実践

—教師同士の学び合いを通して—

北 郁子

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

【概要】本研究は、教師の授業力向上に繋がるような校内研修の在り方を探るものである。実践を通して次の3点を確認することができた。①子どもの学びの事実から自分が見えたことを教師同士で対話することにより、教師個人では気づけなかった新たな視点を獲得し、それが授業力向上につながる②教師が協働して授業実践を行う場（道徳リレー授業）を設定すれば、教科の枠を越えた日常的な教師同士のコミュニケーションを促し、同僚性を生かした授業改善につながる③互いの授業を見合い学ぶ場を設定することで、若手と中堅・ベテラン教師との間でコミュニケーションが生まれ、互いに学び合い、高め合おうとする教師集団になるための意義ある関わりをもたらすこと。また、授業力向上を組織的に推進するには校内のミドルリーダーが中心となり、教師同士の学びを繋げる役目を担い、授業改善へのマネジメントを行うことが有効であることがわかった。

I 問題の所在と方法

1. 問題の所在及び研究の背景

筆者は、金沢大学教職大学院で学びはじめる前の5年間、研究主任として、子どもたちの豊かな学びの実現とそのための教師の授業力向上を目指して、校内研修を企画・立案し、実施してきた。研究推進委員会のメンバー（管理職・各主任で構成）からの意見や先進校の取り組みなどを参考に、本校の現状・課題から効果が上がるであろうと予想されることを実施してきた。しかし、内心ではこれでよいのかという迷い、悩みながら実施してきた。そのような中で昨年度より教職大学院で学ぶという好機を得ることができた。教職大学院での学びは自分だけのものにあらず、学びは「子どもたちや現場の先生方に還元できるもの、喜んでもらえるものを」という思いの中で過ごしてきた。その思いは、研究主任として校内研修を実施していたことから、子どもたちや教師の成長につながる授業改善に向けて効果的な校内研修を探究したいという思いにつながっていった。

校内研修を充実させる必要性は次のような理由から年々高まってきている。1つは、ベテラン教員の大量退職と若手教員が急増しているという教員構成の急激な変化にともなって、若手教師育成が喫緊の課題となっていることである。もう1つは、次期学習指導要領実施に向けた「主体的・対話的で深い学び」という学びの転換への対応である。

中央教育審議会答申(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」において、近年の教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況にあり、継続的な研修を充実させていくための環境整備が必要であることが述べられている。さらに「教員は学校で育つ」ものであり、学校内において同僚の教員とともに支え合いながらOJTを通じて日常的に学び合う校内研修の充実や授業研究をはじめとした校内研修の充実を図ることの重要性を指摘してい

る。

また、次期学習指導要領改訂において、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた教師の授業改善が求められているが、このことについて合田(2016)は、「アクティブ・ラーニング、これをすれば絶対大丈夫」という「型」とらわれて授業をすることはむしろ主体的・対話的で深い学びの対極である。(中略)まず子供たちに付けたい資質・能力を明確にしたうえで、「いくつかの方法があるけれども、今日、目の前の子供たちにとってはこれがベストだ」と、常に最適な指導方法を組み合わせながら、教師自身が能動的・主体的に考えていくのが、主体的・対話的で深い学びの土台であるとしている。教師は子どもたちに身に付けさせたい資質・能力と今の子どもたちの発達段階、学習課題と内容、ねらいを踏まえて授業を展開していく必要があり、これからはより一層の授業力が求められる。この教師の授業力向上の核となる役割を果たすのが校内研修であると言える。

以上のように若手教員育成や次期学習指導要領での学びの転換に移行できる授業力をつけるために校内研修の充実は大変に重要であると言える。

2. 先行研究の検討

では、どのようにして校内研修をデザインし、効果的な実践をしたらよいのであろうか。筆者は、大学院入学後、それ以前とは比べものにならない数の授業を参観し、授業後の研究会(授業整理会や研究概要の発表)に参加させていただくことができた。その参観授業及び研究会は県内外・学校種・教科ともに富んでいた。数々の学校を訪問する中で、子どもたちや教師が生き生きと質の高い学びを実現している学校に共通しているのが、子どもも教師も学び合う文化が創造されていることである。教師集団は研究授業だけでなく、日常的に教師が学び合い、高め合える組織となっていた。そして、授業研究は、子どもの学びの事実に基づいて行われるリフレクティブな授業研究を行っていた。ここ

に校内研修をデザインする手がかりがあるように思えた。リフレクティブな授業研究について藤岡(1998)は「とくに今日の校内研究においては『反省的实践』に焦点を当てた授業研究(リフレクティブ(reflective)な授業研究)の方略が重要になってきている。それは『差異化(ズレ)』と『リフレクション』によって自己組織化し続ける授業研究である」と述べている。さらにリフレクティブな授業研究のシステムについて、次のような4つの特徴があることを指摘している。第1に、「子どもの事実に焦点化する(子どもの事実に焦点を当てるのは授業における子どもの現実を内側から理解するためである)」。第2に、「授業者のねがいや意図を中心に据える(授業実践の主体は一人ひとりの教師である)」。第3に、「コミュニケーションを促進する(授業における子どもの現実に近づくにはそれぞれが自分を相対化し、お互いの「見え」の世界を交流することが必要なのである)」。第4に、アクションリサーチである(仲間と共に成長する校内研究は、実際に授業に参加する人々により、実際に経験していることをもとに行われる。すなわち授業の実際の文脈において、行動を通して、行動を改善していくアクションリサーチである。まず授業をやって、その授業をあるがままに観察し、分析したり評価したりすることで、どんな問題があるかを皆で考えていくのである。その結果これまで気づかなかった視点が生まれたり、授業の構造が見えてくる。それが授業改善への問題意識にもつながってくる)」。やや長い引用になったが、以上の4点である。

また、授業リフレクションが効果的に展開されるための条件について、鹿毛(2007)は「対話」がキーワードのなると指摘する。彼によれば、「対話を基盤とした授業では、授業についてその内側から理解しようとするプロセスが大切にされる。(中略)同じものを見ていても、そこから感じ取れることは人によって異なる。例えば、同じ授業を参観したとしても、教師によ

って着目する出来事は違う。見る眼、聴く耳が一人ひとり異なっているからである。ここに対話を基盤とした授業研究の意義がある。自分とは異質な解釈や視点に出会うことによって『ハッ』とし、それが自らの学びの契機となっていく。そして、このような対話を積み重ねていくことで、教師の力が鍛えられていくのである」という。このことからリフレクティブな授業研究は、子どもの学びの事実から自分が見えたことを教師同士で対話することにより、教師個人では気づけなかった新たな視点を獲得し、それが授業者や参観者個人の授業力向上につながるものだと言える。子どもの事実を基に話し合うリフレクティブな授業研究は、教師の指導方法や技術に重きが置かれたものとは異なるため、若手・中堅・ベテランといった教職経験年数や担当教科の違いを越えて、率直に語り合えるという利点もあると考える。また、次期学習指導要領での子どもたちの主体的・対話的で深い学びのためには教師が何を教えたかではなく、子どもたちがどんな学びを獲得していったかを省察することが必要である。さらに、このような教師同士の協働的な授業に対する省察を繰り返すことが学校全体に学び合い・高め合う文化をもたらすと考える。

熊谷(2012)は授業研究を中心とした「実践と省察」のサイクルを原動力にして、学校内の教師同士で「世代継承（若手教師・スクールミドル・年長の熟練教師）」のサイクルを循環させれば、教師の同僚性を高めることになるはずであると述べている。また、学校内の授業研究を中心とした「行為の中の省察」も重要であるが、学校という現場から一步引いて、教育実践や自らを振り返る「行為についての省察」も必要であり、教師の意識変容の学びや省察という点からも、「学校と学校外」のサイクルを循環させることが求められると述べている。そして、組織における結節点であるスクールミドルが、学校の上下世代の関係を取り持ち、双方に働きかけることによって、3つのサイクルをスムーズ

にまわすことが可能になるとも述べている。
(図1)

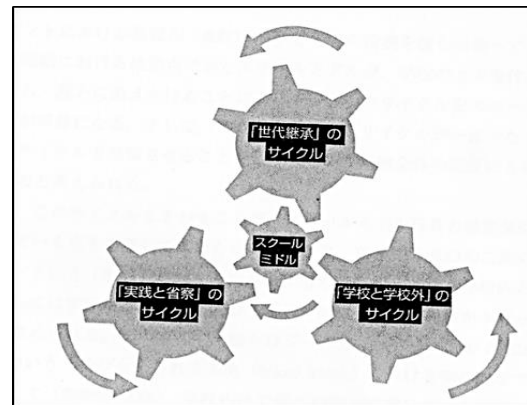


図1 スクールミドルの職能発達を支援する
3つのサイクル 出典：熊谷(2012:127)

熊谷の説は、筆者や中堅教師が図にあるスクールミドル（以降「ミドルリーダー」と呼ぶ）の役割を果たし、「実践と省察のサイクル」「世代継承のサイクル」「学校と学校外のサイクル」をまわし、学校組織が授業力向上を目指して教師同士が学び合うという「協働体制」を構築することをコーディネートしていく見取り図として、実践研究を進めていくうえでの拠り所となる。

3. 研究の目的

教師が授業力向上に役立つと思える校内研修をデザインし、実践する。また、ミドルリーダーがそれぞれの校内研修で教師の学びのコーディネートを行う。そして、それぞれの校内研修を考察することでどのような校内研修が効果的であるかを明らかにする。

4. 研究の方法

次に述べる3つの視点を取り入れて、校内研修を実施する。

(1)「子どもを主語」にした校内研修をする。

①教師の教え方を主語にしない。子どもがどのような学びの過程をとり、何を学んで、何ができるようになったか、また学びに向かう力はどうかであったかを教師同士で省察する。子どもの学びの過程を追うことから時系列にそって授業リフレクションを行う。

②子どもを多面的により深く理解できるように発達障害の子どもに関する研修会を設ける。

①若手前期（教職歴 1 ～ 5 年目）・若手後期（6 ～ 10 年目）・中堅（11 ～ 24 年）・ベテラン（25 年以上）を均等に配置しながら、教師同士が授業について語り合える場を設定する。語り合いの際にはミドルリーダーがファシリテーターを務める。また、一人ひとりの教師がより多く語れるようにグループは 6 人以内にとどめる。

②研究授業だけでなく、普段の授業を全教師が見合う「互見ウィーク」を設定し、若手・中堅・ベテラン教師がそれぞれの授業を参観し、語り合えるようにする。

③道徳リレー授業を実施することで、教師が協働して授業づくりをし、実際の授業を見合うようにする。そこから教科の枠を越えた教師同士の学び合いがうまれるようにする。

①学校内の教師だけでは得られない新しい視点や客観的視点を得たいときや理論的な裏打ちがほしいときに外部講師を招聘する。

②校内研修の前に講師に聞きたいことや悩みをアンケートに書いてもらい、講師と教師をつなげる。

図2 子どもの見取り方について

②授業参観中

・参観者は授業者の働きかけと子どもの反応について詳細に記述していった。

③授業整理会

・参観者を3つのグループに分け、子どもを見取っていたペアが同じグループに入るようにした。1グループは6名程度（つまり3ペア程度）とした。

・各グループにミドルリーダー（研究主任・中堅教師・筆者）をファシリテーターとして配置した。ミドルリーダーには、子どもの事実から具体的な場面に即して、参観者一人ひとりの気づきが語られるようにしてほしいと依頼した。

・整理会では時系列にそって、子どもの学びの事実から「学習意欲の喚起」と「生徒が考えを深め、力をつけること」という2つの視点で成果と課題を出し、グループで話し合って改善策を考えるようにした。

（３）整理会の参観者の談話

若手：S1君なんですけど、何かずっと手遊びをしていて、ずっと下を向いていて、あー、興味ないのかなあと思っていながら見ていたんですけど、（先生が用意した粘土の）山を見て、そこからずっと見ていた感じなんで、やっぱりそういう何か本当の実物を見せるっていう時間は大切になって思いました。

ベテラン：でも、そこちゃんと教頭さんはわかっていて、S1に声をかけとるんや。S1大丈夫かって。そこでも気にかけて、声をかけるっていうのがすごいなって。

中堅：本当やね。（私が見ていた）S2にも（教頭先生は）よく声を掛けていました。

（４）成果と課題

提案授業の前に教頭先生が子どもたちに等高線を具体的にわかりやすく示すために、職員室で粘土を使って山の立体模型を作成されていたが、「教材は楽しみながら作るんや。」とおっしゃりながら作られていることが印象として残っている。授業中だけでなく、授業をする前の教師の姿勢も教えていただいた。そして、

作られた模型を子どもたちが見た瞬間の表情から参観していた教師は、1時間の授業にける準備の大切さに気付いている。ある若手教師からは「教頭先生の授業が見られて本当に勉強になりました。まず、1時間の授業にける準備です。ワークシート、板書、実物、手立てが本当にきめ細かくしてあって、自分の日頃の授業をもう一度見直さないといけないと思いました。」と感想で述べている。また、あるベテラン教師からは「粘土の山作りを隣で見ながら、授業はやはり準備と教材研究だなと感じています。」と述べている。

また、子どもの見取りをすることで、教師の働きかけが子どもにどのような反応をもたらすのか、子どもがどのような場面で意欲を見せるのか、子ども同士の学び合いの深まり具合などを省察することができた。ある若手教師は「一人の生徒の反応に注目して授業について考えることで、とても多くのことがわかりました。どういうタイプの子が、授業のどの段階でつまづいてしまうのか、また、資料の提示の仕方では意欲の低い子もすごく食いつきがよくなったりすることもはっきりと理解できました。今まで自分は、ただグループ活動や話し合い活動をさせた気になっていただけではないかと反省もしました。いろんなタイプの子がいて、意欲に差がある中でよりよいグループでの話し合い活動ができるように自分も授業改善を進めていく必要性を強く感じました。」と述べている。また、ある若手教師は「授業の中で子どもを育てるというのには、声かけや題材、教具など様々なものに力を入れていかなければならないということに気づかされました。一人ひとりの子どもを見て、全ての子どもに『やってみるか』というような気持ちにもっていけるように自身で修養をしていこうと思いました。」とあるように子どもの学びを省察することで、一人ひとりの子どもの学びの姿を考えながら授業づくりをしていく意識が持てたようである。

ベテラン・中堅教師と若手教師をペアにしたことについては、同じ場面で子どもが意欲を持った理由をある若手教師は一つ（山の模型があったから）しか気づくことができなかったが、ベテラン教師の話聞くことで意欲を持たせるための別の視点（教師の声掛け）を得ることができていた。実際の文脈にそって話し合う良さが出ていたと考える。ある若手教師からは「グループ協議や全体会での交流を通して、自分一人では気づかなかった点をたくさん聞けて、今後の自分の取り組みにも取り入れていきたいと思いました。」とあるようにベテラン教師と見え方の差異を語り合うことで視野が広がったようである。また、あるベテラン教師からは「研修会では気になる生徒の様子を見る担当の先生が決められて、その様子を共有しながら話し合いできる態勢はよいことだと思います。」という肯定的意見も得られた。

一方で課題としては、抽出生徒のバランスが支援を要する生徒の割合が大きかったために、幅広い視点で子どもの学びの事実から読み取ったことを語り合うことができなかった点が挙げられる。この点に関して、今後はバランスよく生徒を抽出することが必要であることがわかった。また、あるベテラン教師から「一人の生徒を1時間観察することで、教材の工夫や教師の声かけ、授業の組み立て方がどのように生徒に影響するのかがよくわかった。反面、他の生徒の様子や進度がよくわからなかった。」という意見があった。このことから、全体と個の生徒の2つの側面で見取ることを周知しなければならないことと全体と個の2つの側面を同時に見取れるほどの観察経験を重ねていかなければならないことがわかった。

2. 道徳提案授業

（1）設定内容

日 時：2017年5月23日

授業者：A教諭3年担任（中堅教師）

ねらい：「生徒の考えを深める道徳の授業」について、どのような発問をすれば、生徒の考え

が深まるのかを全教師で授業を参観することを通して学び、個々の教師の道徳の授業実践に生かす。

（2）実施方法

①事前

・本校には道徳の授業実践に長けたミドルリーダーがいる。このミドルリーダーが中心となって今回の提案授業の資料分析や発問、展開について学年で話し合うように依頼した。

・3年を担当している教師集団（以下3年部）で資料分析を行い、発問について検討した。そして、先述のミドルリーダーが担任をしているクラスで先行して授業を実施し、生徒の考えの深まりと変容について、授業後に3年部で話し合った。今回の提案授業では、先行して授業を行ったクラスで出された課題を踏まえ、発問の一部を変えて臨む。

・前回の社会の提案授業では、見取る生徒を指定したが、今回は教師と生徒、生徒同士のつながりをより深く省察したいために、参観者が気になる生徒を自分で選ぶようにした。よって、ペア（ベテラン・中堅教師と若手教師）を組んで1人の生徒を見取るということもしなかった。

・参観者には本時の指導案とともに子どもの見取りを書きとるためのシートを配布した。

・今回は道徳の授業ということで、成果と課題を2色の付箋で貼るという授業整理会はず、
「生徒の考えの深まり」という点で気になったところだけに付箋を貼る形式（図3）をとるということを事前に示した。

段階	学習活動	発問	生徒の考えの深まり
導入	自分自身を振り返る。	〇最近の楽しみは何ですか？	
展開	気になるところを挙げる。	〇資料を読んで、気になるところを挙げてみよう。	
終末	ワークシートに記入し、思いを交流する。	〇あなたのすむ片山津で大切にしたいものは何ですか？	  

全ての段階に付箋を貼る必要はありません。グループで話し合いたいところに付箋を貼ってください。

図3 授業整理会のイメージ

・石川県教員総合研修センター校内研修サポート事業を活用し、外部講師として指導主事に指導・助言をいただくことにした。授業参観後に具体的な場面について指導・助言をいただくことで、それを聞く教師が自分の授業で具体的なイメージをもって指導・助言で得た知識を活用できると考えた。また、日頃の道徳についての悩みについてアンケートを取り、そのアンケートについて助言をいただくようにし、個々の教師の悩みにも対応できるようにした。

②授業参観中

・参観者は授業者の発問と子どもの反応や子ども同士の語り合いの内容について詳細に記述していった。

③授業整理会

・参観者を3つのグループに分け、若手・中堅・ベテラン教師を均等に配置するようにした。
・各グループのファシリテーターは前回と同じミドルリーダー（研究主任・中堅・筆者）にお願いした。ファシリテーターには、時系列にそって子どもの事実から具体的な場面に即して、参観者一人ひとりの気づきが語られるようにしてほしいと依頼した。

（３）整理会の談話

小グループで教師同士が対話をしている場面

授業の後半部分で、子どもたちが「自分の地域で引き継いでいきたいもの」を話し合っているときの様子について教師同士で対話をしていた。子どもたちの発言に深まりが見られず、地域で引き継いでいきたいものを「コンビニ」などと言っていた。あの場面ですらも子どもたちの考えが深まるような発問を教師ができたのかについて方策が見つからず悩み、教師同士の対話が途切れそうになっている状況だった。そんな中で1人の若手教師が見取った子どもについて語り始めたときに、中堅教師もベテラン教師もなるほどと頷くシーン。
若手：S1が「街の雰囲気大切にしたい」って言っていて、それすごく自分が気になって…
中堅：それすごくいいよね。

若手：はい。「その雰囲気って誰が作るのかな」って、周りの子らが聞いてくれたんで、S1が「人が作る」って言っていて、それから「どんな人か」って話になっていって自然な広がりや深まりがあったし、すごいよかったなって、グループ活動で思いました。

中堅・ベテラン：わー。なるほどね。（よく見取ったと感心したうなずき）

中堅：グループ活動の後に「いいことを言ってたよって紹介したい人いない？」って聞いて、他の子らにもこの子の考えを広められたら、地域で引き継いでいきたいものに対してもっと深まりのあるものが出せたかもしれないね。

全員：そうだね。

（４）成果と課題

教師同士で授業への省察を対話を通して行うことで、教師一人では気づけなかった「考えを深めるポイントとなる瞬間」を他教師が他の子どもの発言を指摘してくれたことで気づくことができた。また、子どもの見取りをしていくことで、教師や友達同士の発話がその子どもにどのように影響を与えて、考えが変容するのかを具体的に理解することができた。ある若手教師は「今回の研修を通してたくさんの新鮮な驚きを得ることができました。この機会を設けて頂けたことがとても有難いです。先ず言葉尻や同じような意味でも違う単語に発問を変えると生徒から出る意見も大きく変化してしまうところについてですが、微妙なニュアンスの違いが生徒の発言や反応に影響を与えるので言葉には気を付けないといけないなと思いました。」と感想で述べている。

外部講師の招聘も教師の授業への新たな視点の獲得につながった。指導主事から授業の場面にそって具体的な指導・助言をいただいたが、発問に関して、中学校においてわかりきったことを聞くのではなく、負荷のある発問をすることが大切であると教えていただいた。その負荷のある発問について、あの場面ではこのような発問をするのがよかったのではないかと具体的

に発問を提示され、それを実際に教師が生徒の立場になって答え、その答えを指導主事が教師役としてつなげるという模擬授業のような場面もあった。生徒の考えを深める負荷のある発問とはどういうものを具体的に理解するだけではなく、その発問に対する生徒の答えを生徒同士でどうつなげていくかのコーディネートの仕方も理解することができた。ある若手教師からは「今年度から担任になり、道德の授業を本格的に行ってきて『どうすれば良い発問ができるだろう？』『どうすればもう一段階深まるのだろう？』と考えることができました。今回の研修をうけて、どのように授業をつくっていくと良いかがわかりましたし、中学生に合わせた負荷を考えていくことが必要だとわかりました。」という感想があった。また、ある中堅教師からは「何度授業をしても参観しても、あまりに奥深く、難しい。『負荷をかける』ということに全く思いが至っていなかったため、これまでの生徒の表情を思い浮かべると反省しきりで……。今日の生徒の表情もそのようなことが多かったかもしれない。中学生としてわかりきったことを答えさせるのではなく、本当の意味で考え、議論する道德の授業を目指して教科化に向けての2年間を過ごしていきたい。」と述べている。このように外部講師から「考えを深める負荷のある発問」という新たな視座を得ることができた。外部講師に指導・助言をいただくときは、具体例をもってしていただけるように、公開授業と合わせて講義と演習を行うコーディネートをしていくことが有効だと確認した。

さらに、今回の提案授業でもミドルリーダーが活躍した。授業づくりから提案授業、そして授業整理会までを5人の中堅教師が中心となって運営した。そして、若手教師とベテラン教師をうまく巻き込んで道德の授業づくりについて考えを深め、共有することができた。

前回の社会の提案授業とは異なり、見取る子どもを設定しなかったことについては、設定し

ないことによって、気になる子どもを一人に限定せず自由に追うことができ、そのことによって教師と子ども、子ども同士のつながりを柔軟に省察することができた。一方で子どもを追わなければならないという意識が薄くなり、授業整理会において子どもの見取りの事実から子どもを主語にした話にならない場面が増えた。そして、「先生は、～していてよかった」などのように教師の働き掛けについて議論する場面が増えた。この改善策としては、教室を6つのゾーンに区切り、その1つのゾーンの子どもたち（4名程度）を見取ってほしいと指定することが考えられる。こうすることで、気になる子どもを自分で決めるという自由度があり、かつ見取らなければならないという意識が高まるのではないかと思われる。

3. 夏季校内研修会

（1）設定内容

日 時：2017年8月22日

講 師：金沢大学 武居渡教授

ねらい：発達障害の子どもへの理解と支援の在り方について学ぶことで、子ども理解をより一層深め、子どもとの関わりに生かす。

（2）実施方法

①事前

・教職員には、発達障害の子どもへの理解と支援を学ぶことは、発達障害に限らず、子どもを多面的にとらえて理解することにつながるとその意義について周知した。また、発達障害に関わる日頃の悩みや講師に聞きたいことを事前にアンケートをとった。講義で武居教授にアンケートの内容を踏まえて話をさせていただくように依頼した。

・若手教師がイメージを持ちやすくするために、演習では発達障害を疑似体験する場面を設定するように武居教授にお願いした。

②演習・講義内容

ア．演習（疑似体験）

「読み」「書き」に困難がある子どもの例や「注意力」「対人関係」に問題がある子どもの

例を疑似体験を通して学んだ。

イ．講義

「学習障害」「注意欠陥多動性障害」「自閉症スペクトラム障害」「アスペルガー障害」のある子どもの特徴や子どもの困難に気づき、どのように支援をしたらよいのか、外部とどのように連携したらよいかの講義を受けた。

（３）演習中の談話

生徒役の教師（研修受講者）にはルールブック１とルールブックＡが配布される。ブック１は数字の順に読んで、書いてある通りに行動すれば、先生（Ｔ 武居教授）の指示通りに動けるもの。ブックＡは読んでその内容がわからず指示通りに動けないものになっている。ブック１を渡された生徒役は１０名、ブックＡを渡された生徒役は３名（Ａ、Ｂ、Ｃ）であるが、その両方とも先生の指示通りに動きなさいと言われていてだけでルールブックの違いを知らず、これから何が起きるかも知らないシーン。

生徒役Ａ、Ｂ：（他より遅れて黒板の前に立ち、周りの様子を見て黒板に書き始める）

生徒役Ｃ：（ずっと座っていて動かない。その後、黒板の前で立ち尽くす）

Ｔ：はい、まあいいですよ。

生徒役Ｃ：何をすればいいのか・・・。

Ｔ：（黒板の前に立ち尽くす生徒役Ｃに）ありがとうございます。

生徒役Ｃ：（自分の席にもどる）

Ｔ：もう一回ルールブックを見直してください。ルールブック１って書いてある人は順番に読んだら意味がわかるんです。ルールＡって書いてある人、（生徒役Ａ、Ｂ、Ｃの３人が手を挙げる）はい、３人いるんですね。その人は１、２、３って追って行っても意味がわからなかったでしょう。そうなんです。わざと作ってあるんです。で、どうしました？

生徒役Ａ：あの一、他の人の流れを見て…。

生徒役Ｂ：あの一その流れで…。

生徒役Ｃ：・・・

Ｔ：ずっと座っていましたよね。動かずに。で、

出て、出てってしつこく言ったんだけどずっと動かずに座っていたんだよね。これは何をシミュレーションしているかということ、先生に言われた指示がわからない生徒たちの気持ちなんですね。で、そういう風に振舞っているんです。彼らは。先生が言っていることがよくわからない。じゃあ、周りはどうした、どうしたって。あるいは、先生がどういった指示をしたかわからない、だから席から動けない。前に出なさい、出なさいって言っても動けない。本当にそのときの気持ちになりました？ どういう気持ちになりました？

生徒役Ｃ：不安になりました。

Ｔ：戸惑うよね。ちょっと、え！？何でって、リアクションになりましたよね。ごめんね。どうでした？

生徒役Ｃ：いやーもう一あの一、でも、わからないんで、座っていようと思いました。

Ｔ：あーそうなんです。だからそうやって開き直って、先生が何を言おうがもう座っている。それも一つの方略なんです。生徒さんの。どうでした？

生徒役Ａ：なんか、どうしたらいいのかなって思って、はじめは座っていようかなって、わからないし、座っていようかなって思ったんだけど、みんな立つし、で、私、自分の好きな飲み物を書けばいいのかなと思って。

Ｔ：そうなんです。そんな風に振舞っているんです。だから、（教師は）どうしても何で話を聞いてないんだ！っていう風に言いたくなるんだけど、ちょっと何を指示されているかよくわからない子どもたちの気持ちが、先生からしてみたら「うん？」って行動をする気持ちみたいなものをちょっとなぞってみてほしいなと思って、Ａを引いた先生には申し訳なかったんだけど、そんな体験をしてもらいました。

（４）成果と課題

武居教授から「大人の価値観の枠をいったん外して、子どもの行動の意味を探ること」「子どもの行動にはすべて意味があること」「行動

の一つを取り上げずに、その子の文脈の中で、行動の意味を探ること」の話があった。発達障害に限らず、子どもを理解するには文脈全体の中で、その子の行動の意味を探ることが大切であり、このことが教師力を高めることだと考える。ある2人のベテラン教師からは「子どもが困っているという視点からもう一度その子のした行動やまわりに与えている状況を考えたいと思います。そのためには本人の心をほぐして本音で話していける関係を作っていきたいです。」「今日のお話は子どもたちを理解する上でとても参考になりました。日々、子どもと接していると『どうしてそうなの？』『なんでそうなるの？』と思うことが多々あります。今日もアドバイスいただきましたが、本人とゆっくりと時間を掛けて話し合い、本人の思いやこちらの思いをじっくり伝え合い、信頼関係を築いていければと思います。」と感想で述べているように、子どもの行動の意味を文脈全体の中から理解し、子どもと真摯にコミュニケーションをとることの大切さをベテラン教師は改めて感じていた。また、ある2人の若手教師の感想から「発達障害について、文章だけでなく、体験しながら学べたことが特によかったです。疑似的ですが、同じ立場を経験すると、より寄り添いたい、理解したいという感情が強くなりました。授業に集中できない子に対して、周囲とは異なる黒板やプリントや教科書の見え方、授業をする自分の声の聞こえ方があるのではと常に考えていきたいです。」「冒頭の演習では、何もわからない中、授業が進んでいく不安や自分だけがわからないという疎外感、自信がなくなる生徒の感覚を身を持って体験することができました。目指すゴールは同じでも、そこに手立てを個に応じて行っていくことの大切さを『機会の平等から結果の平等へ』という話をお聞きして改めて感じました。」とあるように、疑似体験したことで発達障害の子どもへの理解と支援についてのイメージを具体的にもつことができ、有効だったと言える。

研修からしばらく経った日に、ある若手教師が「研修を受けてからあの子だったら今こんな風に見えるのかなって思って、教材とか指示の出し方とか考えるようになりました。」と職員室で話をしていた。この研修が子ども理解や子どもへの関わり方、教材・教具の準備や教師の話し方に良い影響をもたらしたと言えよう。さらに、ある若手教師は「自己肯定感が低かったり、人に迷惑をかけなくても内心全然理解できていない子など、困難を持っている子どもとして、自分があまり見られずにいた生徒にも視点を今後は置けるようになると思います。」と述べているように、静かであるが故に見過ごされている子がいることに気づき、子どもたち一人ひとりを丁寧に見ていこうとする意識づけにこの研修がなっていた。このように今回の研修が子どもをより一層理解し、教師の子どもへの関わりを見直すきっかけになったと言える。

4. 互見ウィーク

(1) 設定内容

日時：2017年9月19日～9月29日

ねらい：互いに授業を見合うことで、授業力を高める機会とする。また授業づくりについてのOJTの機会とする。

(2) 実施方法

①授業者は、見に来てほしい授業を決めて、職員室に掲示してある時間割表のコマに色を塗る。

②参観者は、自分の空き時間を見ながら、参観したい授業を決め、授業者に伝える。

③授業者は、参観シートに「どんな授業をするのか」「ねらい」「見てほしいポイント」を記入し、参観者に渡す。

④参観者は参観シートにコメントを記入し、授業後に語り合う。(ベテラン・中堅教師は若手教師を意識して、手法・技などを伝えたり、若手教師は自分の悩みを相談したりする機会となるように心がける。)

⑤参観シートは職員室に掲示する。

（３）参観シートの内容

中堅教師の授業を若手教師が参観したコメント

（前略）ペア活動が本当にステキで、あんな風にしたい！と強く思いました。みんなルールをしっかり守って学び合いながら楽しんでいて、見ていてうれしくなりました。またプリントに面白い突っ込みポイントがあったり、裏面も同じプリントになっていたり、だれない細かな配慮がたくさんでこれは見習わなくては！と思いました。生徒と一緒に勉強させてもらっている気分で、こういう貴重な場を設定していただけて本当にありがとうございました。

ベテラン教師の授業を若手教師が参観したコメント

話し合いのときに、予想を言いたい気持ちをおさえて、グループ活動にもっていくのがいいと思いました。班の意見を端的に褒めるポイントをしっかりと先生がおっしゃっているのがテンポもよくいいと思いました。指示は端的、子どもに活動させる時間は長く、あと大事で押さえるところははっきりさせるなど、授業の中で緩急をつけることが大切だと思いました。本日は授業を見学させていただきありがとうございました。

若手教師の授業を中堅教師が参観したコメント

やさしく、粘り強く教えていらっしやいました。見習いたいです！！キーワードを繰り返し音読させることが大事だと思いました。先生とマンツーマンだからあの子は解けている様子だったので、一人で助言をもらわず、解いたときに、どこでつまづくのかを見て見たいなと思いました。

（４）成果と課題

本校において初めて互見ウィークを実施した。進んで互いの授業を参観しに行こうという雰囲気をつくるために、どの教師がどの授業を参観しているのかを掲示し、まだ参観していない教師には声掛けをした。また、研究主任が参観シートのコメントでよかった部分に色で線を引き職員室に掲示した。（図４）



図４ 職員室に掲示された参観シート

このようにプロジェクトに取り組もうとするときには、その様子を職員室で可視化することが学校全体で取り組んでいるという教師集団への意識づけと雰囲気づくりにつながり、有効であると感じた。また、掲示されている参観シートを読んだ中堅教師からは「自分が行けなかった授業でも、皆さんのメモから学ぶことが多かったです。映像、ICTも生徒の意欲UPに効果的なので、逃げずにトライしていきたいと思いました。先日タブレットの授業にチャレンジしました。」と他教師から刺激を受け、ICTの活用を試みたことが書かれており、職員室に掲示した可視化の効果があらわれていた。

互見ウィークでは、若手教師がベテランや中堅教師の授業を積極的に参観する様子が見られた。ある若手教師が保健体育や技術、音楽という技能教科の授業を積極的に参観する理由を尋ねたところ、「自分は子どもが先ず座っていてくれる教科だけど、技能教科の先生はそうじゃないことが多いじゃないですか。どうやって子どもをひきつけているのかなってすごく気になって。」と言われていた。つまり、普段の授業の悩みを解決するヒントを他教科から得たいという思いがあったようである。互見ウィークの良さは同じ学校の同じ子どもというフィールドの中で他教科の教師が子どもとどのように関わり、子どもがどのような学びをしているかを見ることで、自分の授業づくりへの大きなヒントになるところにあると言える。ある若手教師からは「他の先生の授業の進め方や工夫を見たり、生徒の他の教科での様子を知れたり、自分の授業と比較し、反映でき

る点がとても多く、良い取り組みだと思いました。研究授業など多くの人が見ている中ではなく、平時に近い状態の生徒の様子を見られることも魅力だと感じました。」とある。また、あるベテラン教師からも「音楽と英語を見ることができた。教科は違っても参考になる部分、見習うべき点がたくさん発見できた。」という感想が寄せられた。

さらに、互見ウィークがよいOJTの場になった。中堅教師に授業を参観された若手教師からの感想には「普段はこれでいいのか？と思いながら授業をしているので、見て下さった先生からのお言葉はとても参考になりました。」とあった。ベテランや中堅教師が後輩の授業を参観して送ったコメントを若手教師の授業者が読んで、普段はこれでいいのか自信がないまま授業をしているが、先輩教師から認めていただいたことで自信につながったという声であった。互見ウィークを通して、若手教師と中堅・ベテラン教師が互いの授業について語り合える良いOJTの機会となっていることを実感した。

課題としては、「期間が短いためか、見ることができる教科が限られてしまい残念だった。」

「授業者が見てほしい授業を公開するというのではなく、全ての授業を公開するというシステムに変えるべき。」「授業数の多い先生が見たい授業を見に行くことができなかった。」「1・2学期に1回ずつあったほうがよい。」という意見にあるように、互見そのものはよいが、参観したい授業に行けないという問題点があった。そこで3学期は1月から2月中という長いスパンで設定することとした。

5. 道徳リレー授業

(1) 設定内容

生徒の考えが深まる道徳の授業づくりを目指し、各学年集団で協働して資料分析をし、発問等の授業展開を考え、リレー授業をしていく。

(2) 実施方法

1学期は、3年を担当している教師集団（以下3年部）が5月の道徳提案授業の前に、1年

部が6月の研究授業の前にリレー授業①を行った。3年部は各担任がリレー授業をしていく形であったが、1年部は級外（ベテラン教師）でリレー授業をしていき、最後は筆者が担任をしているクラスで授業を行うという形であった。2学期は全ての学年でリレー授業を行った。リレー授業では、普段なかなかチャレンジすることのできないことをしようということで、ゲストティチャーを活用した授業を行った。各学年の主題や資料名、ねらいは以下の通りである。

1年

【リレー授業 ①】

ア. 主題名 家族愛

イ. 資料名 たったひとつのたからもの

（出典「中学道徳②心つないで」教育出版）

ウ. ねらい 家族への敬愛の念を深め、その一員として積極的に家族を支え協力していこうとする心情を養う。

【リレー授業 ②】

ア. 主題名 郷土愛

イ. 資料名 科学を活かした町おこし

（出典「見つめようふるさと加賀市」加賀市教育委員会）

ウ. ねらい 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めていこうとする心情を養う。

2年

ア. 主題名 郷土愛

イ. 資料名 片野鴨池を守った男

（出典「見つめようふるさと加賀市」加賀市教育委員会）

ウ. ねらい 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めていこうとする心情を養う。

3年

【リレー授業 ①】

ア. 主題名 郷土を大切にする心

イ. 資料名 禁酒の碑

（出典「ふるさとがはぐくむ道德いしかわ」 石川県教育委員会）

ウ．ねらい

- ・地域のために尽くした先人に尊敬の念を深め、郷土の発展に努めようとする心をもつ。

- ・現在の自分にとっての楽しみについて振り返ることで、河合谷村の人々が自分たちの楽しみを断ってまで禁酒を決めた思いを理解するとともに、地域を大切に思う人々の気持ちに共感し、地域をより発展させていこうとする心をもつ。

【リレー授業 ②】

ア．主題名 個性の伸長

イ．資料名 道はいつもひらかれている

（出典「中学生の道德3」 廣済堂あかつき）

ウ．ねらい 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求しようとする心をもつ。

（３）成果と課題

ある若手教師が「道德の授業の作り方が全然わかっていなかったのので、どういう風に題材を選定して、中心発問などを作っていくのか参考になりました。特に学年ごとなので、学年の生徒観を受けて、授業中に予想される展開を考えられるのが良かったです。」と感想を述べているように道德の授業を担当が一人で抱え込むことなく、学年集団（６人程度）で資料を分析し、生徒観からこの発問をしたらどうだろうと話し合い、リレー授業をしていった。そして、どの学年でも１つの授業が終わるごとに教師同士で次の授業に向けて熱心に語り合う姿が職員室で多く見られた。担任だけでなく、級外も積極的に意見を出す場面が多かった。ある若手教師は「リレーのトップバッターだったので、一人で考えるよりも意見をもらえたり、感想をいただけるのは次につながるなと感じました。良かったところは残して、課題は少し修正もでき、良かったです。」と感想を述べていた。また、ある中堅教師は「『他の先生の授業を見てすぐする』というのは、自分の身に付

いているという感じがして、すごく良いです。」という感想を述べていた。この感想から教師同士で道德の授業づくりについて学び合い、高め合えたことがわかる。

リレー授業は一教師ではなく、教師集団で練り上げ、作り上げることができるという良さを生かし、苦手としている部分にも挑戦した。１つは、道德の内容項目のうち特に昨年度うまく子どもの思考を深めることができなかった「家族愛」「郷土愛」を主題として授業実践を行うということである。もう１つは、地域とのつながりを意識したゲストティチャーの活用である。ゲストティチャーと授業を行ったことについてある若手教師は「ゲストティチャーの方が来て下さるのは本当に良かったです。言葉の重みが違ったし、子どもたちの反応もよかったです。」と述べている。また、ある中堅教師は「ゲストティチャーはやはり活用すると子どもの目が違います。できる限り続けていきたい。」と述べている。このことからゲストティチャーが子どもの心に響く道德の授業実践に有効だったことがわかる。

教材づくりにも学年教師全員で取り組み、１年部では子どもたちに「晶子染め」が何かを理解してもらうために学年教師全員で「晶子染め」を体験し、楽しんで染め物をしている場面をビデオにおさめ、道德の導入で扱った。１年部では、１学期に級外のベテラン教師に道德のリレー授業をしていただいたが、心の変容を視覚化する円盤の活用や心情を深めるためのICTの活用など果敢に挑戦され、また子ども同士の発話を上手につなげる場面を若手や中堅教師に示された。そのベテラン教師が「道德のリレー授業を経験できてよかった」と感想を述べられていることに心をうたれた。また、ある日の職員室で２年生の先生方がこのような話をなさっていた。

T1:（級外の先生に）どんなんでもいいし、道德しよう。先生のしやすそうなものすればいいよ。練習だと思ってやりましょう。練習だと思

って。1年も1学期してたもんね。

T2：いいですね。

T1：みんなで教材作ろうね。（話が道徳の内容項目に変わり）あと何をしていないんやろ。あつ、国際理解してないね。でもあと7項目や。

この2年の先生方のお話を聞きながら心が熱くなる思いがした。道徳リレー授業がきっかけとなり職員室の中で教師同士が協働して授業づくりに取り組むよい雰囲気をもたらされるようになっていった。職員室では「この道徳良かったよ。」と共有しあう場面が多くみられる。このような場面で中心となっているのがミドルリーダーである。ミドルリーダーが授業づくりについて話のきっかけをつくり、若手・ベテラン教師を巻き込んで語り合うシーンがよく見られる。

課題としては、リレー授業の全てをその学年の教師が見られる態勢を整えていなかったためにもったいなかったという意見があった。みんなで作り上げたものなので、みんなで参観できる態勢を整えていきたい。

Ⅲ 考察

12月に教職員にアンケートを実施した。その結果を考察することで、実施した校内研修が有効であったかどうかという点について、第1に「子どもの見取り」に着目すること、第2に授業力向上に資すること、この2つの視点から整理してみたい。

1. 「子どもの見取り」を核にしたリフレクティブな授業研究について

子どもを主語にして考えるようになった

・子ども視点で見ることを意識できたので、大変良かったです。流れも大切ですが、子どもの活動で変化するものなので、子どもを見ていた方が良いと思います。（若手）

・特に学力の低い子を見取することで、どこでつまづきやすいのか、手が止まるのか、顔が上がるのかなどを知ることができて良かったです。（若手）

一人ひとりの子どもの学びを意識するようになった

・今までこのような視点をもって、参観したことがなかったので、意識できるようになり、ありがたかったです。どうしても発言の積極的な子と進めてしまいがちになるので、少しですが、気を付けられるようになったかなと思います。

（中堅）

子ども理解への視野が広がった

・授業整理会では、私にはなかった視点のお話もたくさんあり、とても参考になりました。（若手）

・生徒に目を向けることがより多くなったし、他の先生がどういう風に見取りを行っているのかが非常に参考になりました。（若手）

道徳の評価に有効である

・「1人や1部の生徒の1時間を見取る」という活動は道徳の評価にもつながっていくので、その意識をもつことのできるよい機会であったと感じた。知らなければそのままだった。（中堅）

・道徳の評価のためにも変容を見取れるようにしていくのはいいことだと思います。（中堅）

子どもを見取ることの難しさ

・個人活動中心の授業だったので、変容を見取ることが難しかった。グループ活動での子どもの見取りの方が取り組みやすいと感じる。（ベテラン）

・授業者の視点から言えば、授業のもっていき方を見ている先生もあっても良かったかも。（ベテラン）

・1時間の中での変容の見取りは難しかったです。自分の受け持っている、わかっている生徒については、こんな面もあるんだなあと思うでしょうが。（ベテラン）

以上の結果から、若手でも特に1年目から5年目の教師にとって、子どもの見取りを核にしたリフレクティブな授業研究をすることが子どもの学びをより意識するようになり、さらに自己の子どもの見方と先輩教師の見え方の差異から子ども理解への視野が広がったと言える。また、中堅では道徳の教科化及びその評価

への関心が高く、子どもの変容を見取るのに役立つという意見が出された。ベテランに関しては、授業の全体が見えないことや変容の見取りが難しいという意見が多かった。子どもの見取りを核にしたリフレクティブな授業研究をするときに個を見取るだけでなく、全体の流れを見ながらその子どもがどのような学びをしていたかを省察するように事前に周知しなければならないことと子どもの見取りをする授業研究の回数を増やし、習熟していかなければならないことがわかった。

2. 校内研修が授業力向上に有効だったかについて

表1 今年度の校内研修が授業力向上に役立った

	若 手 (1～5年目) 4名	若 手 (6～10年目) 3名	中 堅 (11～24年目) 5名	ベテラン (25年目以上) 6名	全体 18名
4 あてはまる	75% (3人)	0%	100% (5人)	33.3% (2人)	55.6% (10人)
3 ややあてはまる	25% (1人)	100% (3人)	0%	66.7% (4人)	44.4% (8人)
2 あまりあてはまらない	0%	0%	0%	0%	0%
1 あてはまらない	0%	0%	0%	0%	0%

【「あてはまる」の理由】

- ・充実していて、すぐにでも実践できることがたくさん含まれていたので、1学期学んだことが2学期にいかせたと思います。(若手)
- ・いろいろな授業の在り方を見させていただいて、自分の授業を見直すきっかけにもなりました。(若手)
- ・まだ上手にはできないですが、トライしたり、試したりしました。(中堅)
- ・昨年より、子どもの表情を注意して、意識して見るようになったので、授業改善しようとする、しなければならないという気持ちがわき、実際に生かすことができたように思うから。(中堅)
- ・道徳のリレー授業を経験できてよかった。(ベテラン)
- ・刺激になったし、教師も学び合いが大切だと思います。(中堅)
- ・いろいろな研修から参考になるものばかりだったと思います。ありがとうございます。(中堅)

【「やや当てはまる」の理由】

- ・実践できた部分とそうでない部分があったので。(若手)
- ・全てではないですが、できるだけ学ぼうとして、引き出しが増えたと感じた。(若手)
- ・上手に活用することはできませんでしたが、こんな方法もあると視野は広がりました。(若手)
- ・自分の授業で取り入れられることは取り入れていきたいと思います。(若手)

中堅教師はミドルリーダーとして日々授業改善に積極的に取り組んでいることもあり、研修で学んだことを自分のものに引き寄せて活用しており、そのため校内研修が授業力向上に有効だったと感じているようである。また、若手教師は校内研修によって、視野が広がったと感じているものの実践できるところまでいかなかったと評価している。いずれにせよ、校内研修が教師個々の授業改善への動機づけにつながったと考える。

3. 授業に関する日常的な対話の増加について

表2 校内研修等を通して、日頃から他の先生方と授業について話し合う機会は増えた

	若 手 (1～5年目) 4名	若 手 (6～10年目) 3名	中 堅 (11～24年目) 5名	ベテラン (25年目以上) 6名	全体 18名
4 あてはまる	25% (1人)	33.3% (1人)	60% (3人)	16.7% (1人)	33.3% (6人)
3 ややあてはまる	50% (2人)	66.7% (2人)	40% (2人)	66.7% (4人)	55.6% (10人)
2 あまりあてはまらない	25% (1人)	0%	0%	16.7% (1人)	11.1% (2人)
1 あてはまらない	0%	0%	0%	0%	0%

【「あてはまる」の理由】

- ・研修会ごとに話を必ずするので増えたと思います。(若手)
 - ・特に教材研究（準備）を通じて、話し合う機会を多く持てたように思います。また、それが授業改善につながったと思います。(若手)
 - ・いつも真面目に話していると思います。特に道徳は。(中堅)
 - ・特に道徳について、資料だけでなく、発問、導入についても話し合っているから。(中堅)
- ### 【「ややあてはまる」の理由】
- ・若い先生方と先輩の先生の授業について話し合い、学ぶことが多くなったと思います。(若手)

・道徳や学活など共有することでの話は増えました。(若手)

・校内研修を通して授業の相談をするきっかけになりました。(若手)

・校内研修を通してもあるけど、それ以上に普段から道徳や教科についてオープンに話し合う雰囲気があると思います。(中堅)

・もう少し仕事にゆとりがあれば、授業について話ができると思います。(中堅)

・互見授業で話し合う機会ができた。(ベテラン)

・普段ちょっとした機会に授業を見たことで、「あれはどうだったの?」とか「ここはどうもっていくの?」とか若い人に聞くこともあった。聞いただけで話し合いにはなっていないが……。 (ベテラン)

・授業や研究の話がよく出るので、意識することが多い。(ベテラン)

【「あまりあてはまらない」の理由】

・特別支援学級ということもあって、授業について話すことはあまりないのですが、またいろいろな話をお聞かせいただけたらと思います。(若手)

日常的な対話の増加について、道徳の授業についての会話をすることが多くなっていることがわかった。道徳の提案授業や研究授業、リレー授業が対話の増加のきっかけとなっていると思われる。また、互見ウィークがベテラン・中堅教師と若手教師とで対話をするよいきっかけになったと思われる。小規模校で5教科(国語・数学・理科・社会・英語)は2名程度、技能教科(音楽・美術・技術・家庭・保健体育)は1名程度の教員配置なので、教科の話を日常的に行うことは少ないようである。だからこそ、教科の枠を越えて話し合える道徳や互見ウィークは教師同士のコミュニケーションを増やす上で有効であると考えます。また、特別支援学級教師が話し合う機会があまりないと答えていることについて、筆者も含めたミドルリーダーが進んで対話をしていく必要があると感じた。

Ⅳ 本論の成果と課題

実践を通して、校内研修においては、子どもの学びの事実から自分が見えたことを教師同士で対話することにより、子どもの学びの過程をより深く省察することができ、そのことが個々の授業実践で子どもの学びの過程を大切にするようになったり、教師の子ども理解についての視野がひろがったりするなどして、授業力向上につながることがわかり、リフレクティブな授業研究は有効であると言える。また、道徳リレー授業のように教師が協働して授業実践を行う場をマネジメントすることは、教科の枠を越えて日常的な教師同士のコミュニケーションを促し、同僚性を生かした授業改善につながることを確認できた。さらに、互いの授業を見合い、学ぶ場を設定することで、ベテラン・中堅教師と若手教師の間でコミュニケーションが生まれ、互いに学び合い、高め合おうとする教師集団になることがわかった。そして、授業力向上を組織的に推進するには校内のミドルリーダーが中心となり、教師同士の学びを繋げる役目を担い、授業改善へのマネジメントを行うことが有効であることがわかった。

参考文献

- ・中央教育審議会(答申)(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」
- ・合田哲雄(2016)『「アクティブ・ラーニング」を考える』, 東洋館出版社
- ・藤岡完治(1998)「仲間と共に成長する一新しい校内研修の創造」, 浅田匡・生田孝至・藤岡完治編著『成長する教師－教師学への誘い』金子書房
- ・鹿毛雅治(2007)『子どもの姿に学ぶ教師 「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』教育出版
- ・熊谷慎之輔(2012)「スクールミドルの職能発達を支援する仕組み」小島弘道・熊谷慎之輔・末松裕基編著『学校づくりとスクールミドル』学文社